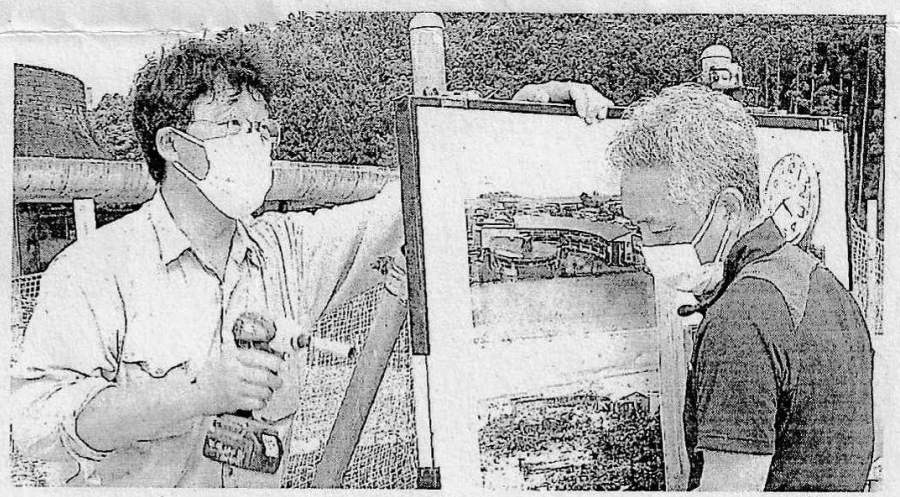
手作りの案内板 撤去に複雑な思い

「震災遺構大川小学校」（宮城県石巻市）の一般公開が始まる1週間ほど前。児童の遺族らでつくる「大川伝承の会」のメンバーたちが校舎敷地に集まっていた。自分たちで設置した手作りの案内板を撤去するためだ。公開までに移動させるよう、市に要請されていた。

約4年前から周辺の7カ所に写真や図を並べた。震災前の地域のお祭りや学校で遊ぶ子どもたちの様子のほか、子どもたちが当時避難したのは、近くの裏山ではなく津波が押し寄せる川方向だったことも示した。

もともとは2013年ごろに語り部活動を始めた際、見学者に説明するため、立ち入り禁止のロープにぶら下げていたものだ。説明後も見入る見学者が絶えず、片付けられなくなった。



案内板を撤去する紫桃隆洋（左）＝宮城県石巻市釜谷

伝承の会共同代表の鈴木典行(56)は「我々がいない時、これが語り部をしてくれた。宝物みたいに大事にしてきた」。

メンバーの一人、紫桃隆洋(57)は複雑な思いで撤去作業に加わっていた。「新しい伝承館に、この案内板以上の説明ができるのだろうか」。遺構のあり方をめぐって市と協議するなかで、不満を募らせていた。

5年生だった次女を亡くした紫桃は、市と県を相手取った大川小津波訴訟の原告団共同代表でもある。市が昨年11月に示した展示案では訴訟に触れられておらず、見直しを求めた。だが、市が再度示したのは、判決などの日付のほか、裁判所の判断をごく簡単にまとめたもの。これに紫桃は強く反発した。

なぜ子供たちが死ぬことになったのか。どうすれば命を救えたか。これを考えるきっかけになる重要なポイントが、判決には含まれていると考えていた。紫桃はさらに全面的な書き換えを要請したが、最終的な文面が示されぬまま、開所式典の案内が届いた。

「遺構は命を考える大切な場所。犠牲になった子供たちが望む展示にするため妥協したくない」。式典の出席は辞退した。

（原篤司）